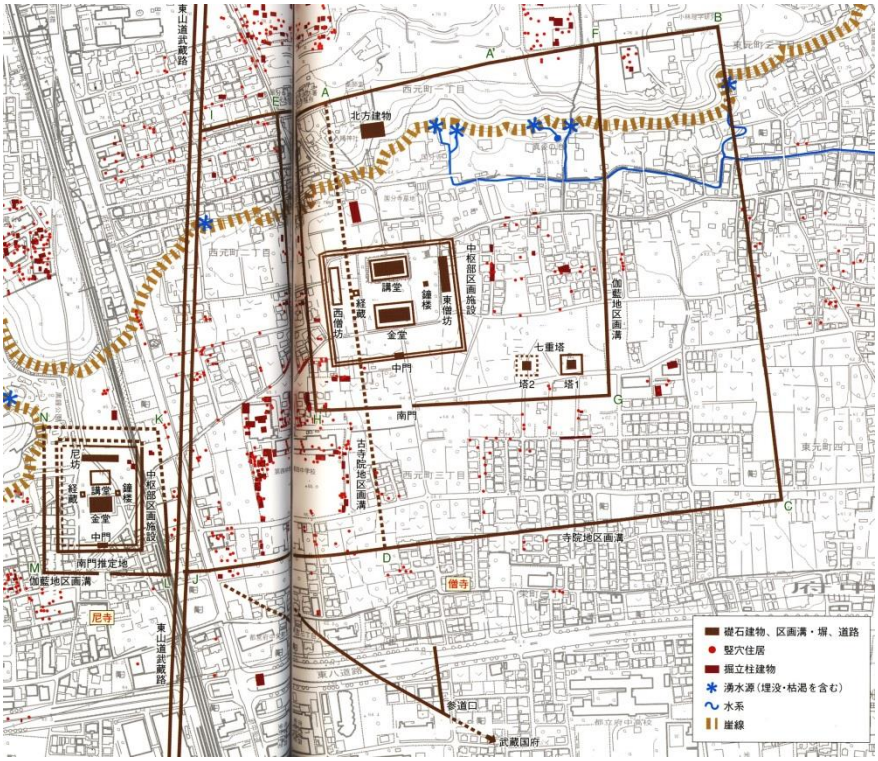
★「武蔵国府寺」創建伽藍の復元（訂正版２―１）

川瀬健一

「武蔵国分寺」とされてきた古代寺院の変遷について、従来説はどのように論じてきたのか。「武蔵国府寺」創建伽藍を復元する前に、この従来説を確認するとともに、この説に含まれる矛盾点を明らかにし、この矛盾点を解決する 新たな説の設定を試みていきたい。

１）「武蔵国分寺」遺跡の全体像とそこに見る問題点



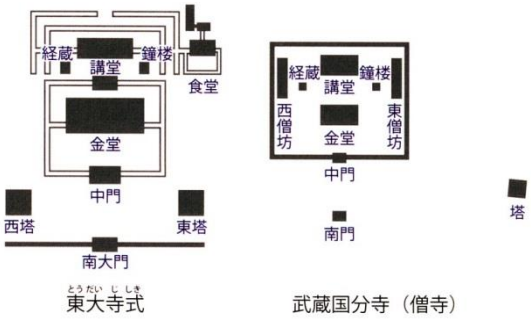
（「武蔵国分寺」遺跡全体図：図の上がほぼ真北）

この古代寺院遺跡は特異な形態を持っている。

まず第一には、金堂を中心とした伽藍（仮にこれを「金堂院」と名付けておく）から塔１がかなり離れた位置にあるということ。その距離は「金堂院」の伽藍中軸線からだと 210 m離れている。どう見ても一体の伽藍とは思えないことである。そして、この塔の南北軸と「金堂院」の南北軸（＝伽藍中軸線）との向きが異なることである。塔の南北軸はほぼ真北をむいているのに対して、「金堂院」の中軸線は真北から約７度西に傾いていることである。これも「金堂院」と塔とが別の伽藍である可能性を示している。そしてこの塔１から西に 54m離れたところ（互いの塔心礎間の距離）に塔２が存在しており、この塔もまた「金堂院」の伽藍中軸線からは 156m も離れた位置に存在しているのだ。ただしこの塔２は南北軸が真北から僅かに東に傾いており、基壇版築の中から９世紀中ごろの土器が出土し

ていることから、伽藍焼失後の９世紀に作られたものであることがあきらかで、最初の伽藍のときは存在していない。

この「金堂院」と塔１との南北軸の違いと「東大寺式」とされるにしてはあまりに塔が「金堂院」から離れていることに古田史学の会会員の肥沼さんが気が付いてご自身のブログにこれを掲載し、『真北を向いている塔１は九州王朝時代の建築で西に７度傾いている「金堂院」は近畿天皇家時代に建築されたものではないか』との仮説を提示された。この仮説に興味を持たれた古田史学の会会長の古賀さんが「武蔵国分寺」遺跡を実見し、これを契機に『多元的「国分寺」研究会』とそのブログが開設されたそのきっかけである（のちに肥沼さんの仮説の後半部分は否定されるのだが)。



（東大寺式伽藍配置と武蔵国分寺の伽藍配置）

たしかに肥沼さんの観点に立って遺跡地図を見ると、塔を中心とした伽藍と金堂を中心とした伽藍という、二つの異なる伽藍が存在しているように見える。そして実際にそれが事実だと実感できる地図も存在していた。それは、「1956・58 年の調査区域」という 55 年度に作成された「国分寺」周辺の詳細な地形図である。

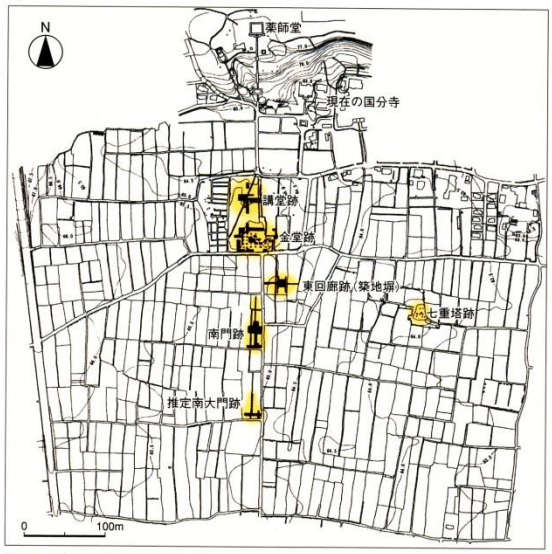


図 14 ● 1956・1958 年の調査区域
考古学者・建築学者共同の本格的な発掘調査にあたって 1955 年度に作製された僧寺周辺の詳細な地形図。黒塗り部分が発掘区。図中の「推定南大門跡」からは、遺構は確認されなかった。

（1956・58 年度の調査区域図）

この地形図は地図の北が真北を示すかのように作られているのだが、実際にはこの図の北を示す記号は西に 7 度ずれていることを念頭に置いてみてみよう。なぜならこの北の記号は、実際に発掘された「金堂院」の西に 7 度傾いた伽藍中軸線と平行に走っている現在の国分寺の参道の方向を向いているからである。

この地形図に示された線の多くは道路と畑や田んぼのあぜ道と思われる。この道路の中で東西方向に伸びた道に注目してみよう。

なんと国分寺の参道を境に西側の道は西に 7 度傾いた参道に直交し、東側の道はほぼ東西の向きに引かれ、国分寺の参道にはわずかに 90 度より少し大きい角度で交わっていることがわかる。そしてこの図の中の「南門跡」とされたところにある東西方向の太いトレンチからのちに伽藍南辺区画溝と呼ばれる塔の南を通って東西に掘られた溝が出てくるわけだが、この参道脇の溝の東の延長線上に一本のあぜ道が存在し、参道の東側の道はみな、このあぜ道に平行に走っていることに気が付く。そしてのあぜ道のすぐ北側にある「七重塔跡」の不整形の遺跡もまたその南北軸は真北を向いており、この塔跡のすぐ東側に南北に走り、先のあぜ道が直角に北にまがったその先にあるある道こそ、のちに伽藍南辺区画溝が向きを変えて北に向かったものであることが確認されたその形跡すら示しているのである。

このことは「滝口宏による調査略図（1966 年秋）」に示された僧寺伽藍境界溝（これが後に伽藍地区画溝とされたもの）と先の地形図のあぜ道を比較してみると良くわかることである（この図の北を示す記号もまた真北を向いていない。国分寺の参道の向きを北として図を作ってしまったため、正しくは西に 7 度傾いている）。

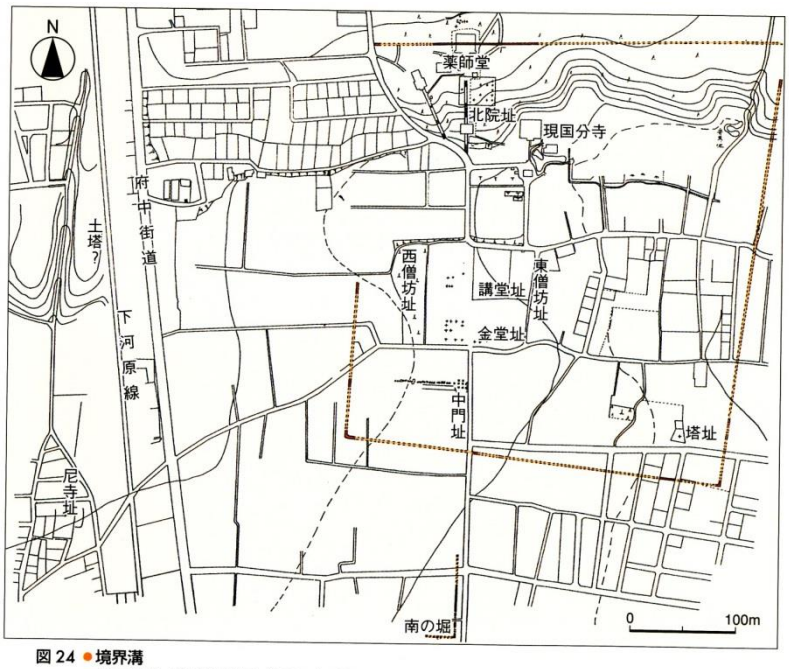


図 24 ●境界溝
滝口宏による調査略図（1966 年秋）。一部改変。

（「滝口宏による調査略図（1966 年秋）」）

まだ宅地開発がされていない、おそらく江戸時代以前からの土地の記憶を残しているこの地形図からも、「武蔵国分寺」とされる古代寺院が、二つの異なる設計思想から作られた伽藍からなっていることを示していた。

第二に、この塔と「金堂院」という一見して別の伽藍を一体化するかのように、伽藍地区画溝と名付けられた大きな溝が周囲に巡らされていることである。そして奇妙なことに、この伽藍地区区画溝は、それぞれの部分によって、その向きが異なることである。FG 線はほぼ真北南の方向であり、GH 線はこの FG 線に直角に交わってほぼ東西を向いている。しかるに西の線である EH 線は「金堂院」伽藍中軸線にほぼ平行に走りその向きは西に約 7 度傾いているのである。

このことはこの伽藍地区区画溝とされた溝もまた全体が同じ時期に作られたものではなく、真北と東西を向いた部分は塔が建設された時期に作られた可能性を示し、「金堂院」の伽藍中軸線と平行に作られた部分は、「金堂院」が作られた時期に作られたことを示しているものと思われる。

さらにこの伽藍地区画溝の北辺である EF 線は南辺の GH 線とは平行ではなく大きく傾いている。この線は寺地の北側の国分寺崖線上にある北方建物を伽藍に含むため、その崖線に沿って設けられたために傾いているものと思われる。

伽藍地区区画溝自体にも、異なる時代に異なる設計思想で作られた二つの伽藍があることを示している。

さらに第三にこの「金堂院」と塔とからなる伽藍中枢を取り囲むように設けられた寺院区画溝もまた特異な形態をしている。その東辺の BC 線は「金堂院」伽藍中軸線に並行で西に約 7 度傾き、南辺の CDJ 線は東辺に直角に交わって寺院の西にある寺域の西辺をなす東山道武蔵道という当時の官道に接続している。さらに寺域区画溝の北辺は先の伽藍地区画溝の EF 線を東西に伸ばした形になっているのである。

不思議なことに「武蔵国分寺」の区画溝はどれも不整形で歪んでることに特徴がある。

このことは先に見たように、この古代寺院遺跡が異なる時期に異なる設計思想で作られた伽藍を合成したことからくるように思われるのである。

なお図で明らかなように東山道武蔵道の西側にはこの道と同様にほぼ真北南を向いた形で「武蔵国分尼寺」遺跡が存在している。

この「武蔵国分尼寺」とされた古代寺院遺跡もまた、「国分寺」とされた遺跡の塔 1 を中心とする伽藍と同じ設計思想で作られていること。そして両者の中間にある古代官道である東山道武蔵道もまた同じ思想で作られているということは、この三者が同じ時期に同じ建設主体によって作られた可能性を示していることも注意したいところである。

（２０１６年１０月１４日）